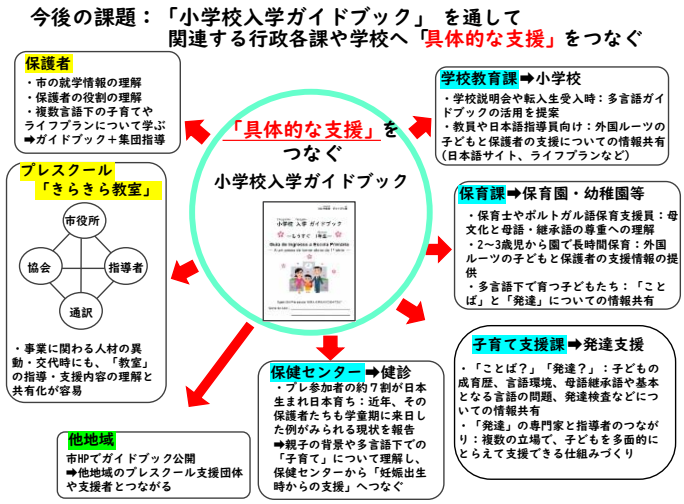
実践活動報告書

大垣市プレスクール「きらきら教室」　坪井牧子

開室 11 年目となる大垣市のプレスクールにおいて、下記の課題を本研修の課題として実践活動を行った。

1．２つの課題

課題１：プレスクールで出会う多様な言語文化背景をもつ 5 歳児と保護者を理解し、様々な支援に「つなげる」ために、園や小学校の先生と「つながる」だけではなく、様々な専門性（発達や保育など）を持った人材間で顔の見える「つながり（関係）」や相談できる体制を作りたい。



課題２：2020 年 1 月「小学校入学ガイドブックーもうすぐ 1 年生―」完成。ガイドブックは、学校情報の他、外国ルーツの子どもや保護者のための様々な支援情報をまとめた冊子。外国人保護者だけでなく、事業側（市役所、協会、指導者、通訳）の共通理解のためにも役立ってきた（黄色）。今後は、子どもに関わる他の行政機関（水色）や他地域（黄緑）でも広く活用してもらうための広報活動に努めたい。

以上、２つの課題を解決し実践するための具体的取り組みとして、まず関連する行政各課や学校へ「ガイドブック」を持参し、各組織のニーズに応じた情報と支援を広報し「支援」の理解者を増やしていきたいと考えた。行政各課に伝えたい「具体的な支援」については、図に示す通りである。そして、子どもたちへの支援が「複数の目で見守られ」「とぎれない」「つながる」ことを目指したい。

2．課題設定した背景

・プレスクールでは、「日本生まれ日本育ち」の子どもが約 7 割を占め、「日本で学童期を過ごした経験のある」保護者も見られるようになった（1.75 世）。子どもの多様な言語環境と成育歴が、「発達」や「言葉の育ち」に影響していると感じる事例も多い。「言語」×「発達」×「外国ルーツ」の問題について、それぞれの専門性を持った人材同士できちんと論じる事が出来る体制の必要性を感じている。現場の状況とニーズを把握し、必要な部署と人材を「つなげる」事が、コーディネーターの役割だと考えた。

・「日本語教師」として教育委員会管轄の「日本語教室」「初期指導教室」を経て、市役所管轄での「プレスクール」に携わってきて、教室立ち上げ時の「行政」「組織」の役割と実行力を十分感じてきた。しかしながら、職員の異動（1~6 年）や指導者の交代の度に「教室」の理解や「現場の子どもの理解」を共有し、内容を充実させて維持していくことの難しさや縦割り行政の壁も同時に経験してきた。

・行政の立場と現場指導者側との間で、問題解決に対するギャップがあり、様々な問題に一歩踏み込んで、支援や学習に「つなぐ」行動の大切さを感じてきた。

・大垣市では、2012 年よりプレスクールを実施しているが、全国的にはまだ導入していない地域が多いのが実情である。プレスクール先行例としての活動を他地域へも広報することにより、その必要性と重要性を伝えていきたいと考えた。

３．本課題に対して今年度（2022 年度）、実践してきた活動

下記、A 事業側の活動(黄色)、B 他の行政機関に関する活動(水色)、C 他地域での活動（黄緑）を示している。

A-①2022 年度プレスクール事業実施期間：6 月中旬～2023 年 3 月上旬(現在活動中)

語い調査(6 月)、説明会（9 月)、園での巡回指導（9 月末～2 月末)、拠点園での集団指導（10/8、11/12、12/10、1/21、3/4）参加園児 35 名、巡回園 16 園、指導者 5 名。月 1 回全体会と指導者会の実施。

A-②7 月末：市役所まちづくり推進課担当者(2 年目)とガイドブック年次改訂作業終了。

A-③11 月 25 日：プレスクール全体会（市役所・協会・指導者）で、ガイドブック作成に至った経緯(過去 5 年間の集団指導の内容一覧)とコンセプトについて ppt で説明。また、ガイドブック完成後、コロナ禍になり、例年 5 回実施していた集団指導を実施できない 2 年が続いた事、今年度は、5 回実施予定（10/8、11/12、12/10、1/21、3/4）で、ガイドブックと集団指導内容を関連させることを再確認。

A-④11 月 30 日：指導者会　「子ども指導・活動の工夫」について説明　資料作成

B-⑤9 月 30 日：第 1 回集団指導「学校説明」を依頼した学校教育課担当者と打合せ。

B-⑥10 月 7 日：「飛び出す市役所　外国にルーツをもつ人の入園申込をサポート」を見学。申込来場者を待つ間、保育課担当者 3 名と歓談。愛教大出版の「幼稚園保育園のガイドブック」や多文化保育の本の紹介や大垣市の「小学校入学ガイドブック」を説明。また、ポルトガル語保育支援員 2 名の方と、園で関わる子どもと保護者の様子や各支援員さんの「母語保持」「保護者の保育」について情報収集。後日、お 2 人には、ガイドブック（ポルトガル語版）と関係する情報をまとめた資料を届ける。

B-⑦1 月 16 日：「令和 4 年度（2022 年度）　第 3 回大垣市外国にルーツをもつ児童生徒教育担当者会兼大垣市日本語指導が必要な児童生徒に係る教育支援協議会」に出席（西小学校)。協議会にて、「ガイドブック(やさしい日本語版)」と「小学校での活用」資料を配布し説明。当日の参加者は、大学教授 1 名、学校教育課 3 名、語学指導員 5 名、日本語指導員 8 名、西小日本語担当者 4 名、まちづくり推進課 1 名、国際交流協会 1 名。現場の日本語担当教員の方より、プレスクールの引継ぎ資料(調査票と指導記録票)を 4 月担当者会での引継ぎを再開してほしいとの依頼があった。

B-⑧今後の実践活動：こども未来部保育課子育て支援課（発達）と保育課、保健センターの訪問。めざしたい「つながる」「とぎれない」支援として、担当者とつながるよう広報活動の予定。現在、関係部署にとって共通の問題認識がもてる具体的なデータや資料を準備中。

C-⑨9 月 10 日：　あんじょうまざりん(愛知県安城市)主催「プレスクールサポーター養成講座」で講師を務め、大垣市のプレスクール 10 年とガイドブックを紹介。就学前の子どもたちと保護者理解のためのワークショップを行う。

４．実践活動を通して、考えた事

・今回の研修で設定した課題は、事業側の間でプレスクール活動への共通理解があるという前提で考えた課題であったが、実際には、6 年間担当だった市役所主幹が 4 月異動となり、新たな理解と関係づくりの年となった。また、2020 年 1 月完成のガイドブックに準じて行う集団指導については、過去 2 年間、コロナ感染拡大予防のためにイレギュラーな形で実施してきたため、今年度は、ガイドブック完成後、初めて集団指導 5 回の指導内容（保護者・子ども・親子指導）の正常化に努める必要があった。

　つまり、今年度、事業側の共通理解は出来た上で、他の行政各課や人材とつながる活動に広げたいと思っていたが、現実には、自分を含めた事業側間で、活動内容について確認しながら進めていくことが大切だと感じた 1 年でもあった。

・プレスクールの指導で巡回する園では、保育の専門家である園の園長先生、先生方とのお話から得た現場

の子どもたちの情報がとても参考になった。また、園に関わる発達支援の先生や母語保育支援員の方などとつながることが出来、今後の体制づくりに期待が持てるように感じた。（保育園・幼稚園）
・今年度は、対面で保育課や学校教育課の会議などが再開、参加することが出来た。顔の見える形での説明が出来、横のつながりを確認することが出来たのは、とても有意義であった。（小学校、学校支援課など）
・他地域への広報：2022 年 3 月子どもの日本語教育研究会で「大垣市のプレスクール 10 年」について発表したのが縁で、安城市で日本語学習や子育て支援をしている団体「あんじょうまざりん」さんから依頼を受け、「プレスクールサポーター養成講座」で講師を務めた。この経験は、大垣市のプレスクールについて、客観的に考える機会にもなった。

５．実践活動で、コーディネーターとして果たした役割
・A 事業側の立場の 1 人として①～④：今年度、市の職員の異動で改めて感じたが、関ってきた年数・経験は違っても、事業の維持運営上、事業全体会議の中で皆が議論していかなくてはならない。例年通り、昨年の会議資料配布をして意見を聞いても、同じ土俵で考えたり意見を出し合ったりすることは難しい。特にこの 2 年間は、コロナ禍でイレギュラーな開催状況でもあった。そのため、同じ土俵で意見を出し合えるような資料を作り、より良い活動となるような施策の具体的な提案や理由などを共有していく事が必要だと感じた。「過去 5 年間の集団指導データ」や「ガイドブックと集団指導の相関」「子ども指導・活動の工夫」などの資料を作り、説明や提案をした。人材の異動や交代の中、市と協会と指導者間をコーディネートすることが出来たのではないかと思う。
・B 他の行政機関との関係について⑤～⑧：縦割り行政の中で、行政以外の立場の人間として関わっていく難しさを感じてきたが、今回の研修の課題設定をする事で、自分自身の行動の後押しとなり、積極的に関わろうと努めた。一歩ずつではあるが、関連部署の様々な立場の方と話をすることによって共感する仲間を増やし、コーディネーターの役割となる活動が出来たのではないかと思う。
・C 他地域とのつながり⑨：「プレスクール」をキーワードに他の地域の団体や人材とつながる事が出来、その経験を活かして、大垣市の「指導者育成」について、より具体的に市や協会と話す機会となった。

６．地域日本語教育コーディネーターとして大切にしたい視点
・現場に拘り、対象者となる子どもや保護者の声を聴き、現状を把握して、支援や活動を考えていく姿勢。
・例え専門や経験値が違っても、関係する部署や人が、お互いの意見を出し合っていける資料づくりや仕組みを考える姿勢。
・外国につながる「子ども」「保護者」に関する他地域の取り組みや全国レベルでの情報を把握し、支援グループとのつながりを持って、「何ができるか」を常に考える姿勢を持つこと。そして、その情報を必要と思われる地域の行政や人材と共有していく姿勢を持ち続けていくこと。

７．実践において、難しいと感じたこと、今後に向けて知りたいこと
・現在、プレスクールの一指導者としての立場なので、行政の他の部署と連絡するには、一緒に活動している市担当者を通して依頼をすることになった。まず、市担当者にこちらの意図することを理解してもらう事から始まったが、忙しい行政間同士、相手の仕事に対する配慮もあり、関連する部署へ繋いでもらうまで時間を要した。特に行政間においては、現場の問題を共有する難しさを感じた事が多かった。
・研修後、地域日本語教育コーディネーターが、対外的に認知されて、個としての活動のフィールドが広がると嬉しい。地域人材として行政への通知などを行ってもらえると活動の後押しになり心強く思う。